

第35回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、各部門の最優秀作品を紹介します。

■小学校6年生の部 最優秀賞

やましすけの君へ

弟子屈小学校 羽田 菜々子さん



この本は、軌博光、ニッケンムは、てんつくという人です。この人は、笑い、楽しいながら世の中に、笑顔と元気を増やそうと、海外支援、環境問題に力を注いでいる人です。

「田マン募金」という活動をしていて、その募金をアフリカなどに井戸を作ったり、植林活動などを行っている人です。その人には、沢山の出会いと、仲間達と共に楽しみながら、あせをかきながら地球を守るために、やっているところがすごいなあと思う、いつか私も地球のために、何か仲間とできたらなあと思うています。この本は、その人が書いた詩の本です。私は、好きな詩を書きたいなあと思います。「一人一人は、パズルのピースのようなもの。声をかけ合いつながら合せて、足りないところを補い合えば、みんなで一緒にしあわせになれる。パズルのひとかけらを、ピース(PIECE)と呼ぶのは、一人一人が平和(PEACE)な世界のつくることのできるひとかけらだから。助け合ったら、何とかなるし、助け合ったら、うまくいく。今の自分を抱きしめながら人生を楽しもう。」この詩を読んだ時、それぞれみんなち

がって、パズルのピースのようにてっぺりやひっこみがあって、いいんだなあと思えました。何か困ったり、できない時は、助けてもらって、助けてもらって、今度は、自分が何かの力になってあげて、そうやっておたがいを、思いやりながらいると、争い事もなくなったり大きな意味で言う戦争もなくなるのかなあと思いました。

もう一つの詩は、「ミスをしたり、心ない言葉を言ってしまったり、そんな時自分にこう質問をしてみる。」「動く自分」「ためらう自分」「どっちが好き?」「自分」「自分」「どっちが好き?」「あきらめる自分」「あきらめない自分」「どっちが好き?」「ミスを見つけた時、拾う自分」「見て見ぬふりをする自分」「どっちが好き?」「笑う自分」「笑わない自分」「どっちが好き?」「すべてできるわけじゃないけど」「これならできると思ったことをひとますやってみよう。自分に正直に動いてみれば、重苦しく曇っていた空が晴れていくかのよう、心が明るくなる。心が明るくなる、人生がどんなにすばらしいものだったかを知るようになる。自分を好きになるために今日、一つ一つやってみよう。人生は楽しくてしょうがないものになる。嫌いな自分を責めるかわりに好きな自分に一歩向かおう。」

この詩を読んで、自分に問いかけてみました。やる前から、自分は、きっとできないと思いきいんであきらめてしまった事や、友達が元気がない時、声をかけた

いけど、一言も何も話せなかった事、それは、本当に曇り空がずっと続くような心でいました。この詩のように、自分に正直に動いてみようと思えました。一つ一つゆっくりと、正直に進んでいけば必ず今まで見えなかった自分が見えてくるような気がしました。

最後に「ありがとう」「の反対の言葉は、「むかつく」でも「不満」でもなくあたり前だということ。今朝、なにともなく目が覚めたということ。家族や大切な人が今日もなにともなく暮らしているということ。寝るところがある。食べるものがある。自分のことを待っている学校や会社がある。太陽は、今日も昇り、風が吹いている。あたり前のように身の周りにもあるものももしかしたら、明日なくなる可能性だってある。Oではないのだから。幸せはあなたのそばにある。という詩です。

アフリカやカンボジアなどの貧しい人達は、今日食べる物がなく家もなくそれでも夢をあきらめず、一生けん命も暮らしていると思います。私は、日本という国に生まれて、弟子屈という町に暮らして学校に通っています。そしてごはんを食べ、お風呂に入り、あたたかい布団で眠っています。あたり前のように、暮らしていたけど、それはあたり前ではないと言ふ事、自分が出る事は、何かと考えました。それは今ある幸せに感謝して一日一日を大切に生きて行こうと感じました。自分がなやんだりしていた事が小さい事のように思えました。今、

こうして元気になれる事に感謝して、毎日大切に暮らすことが一番大事な事だと気づかされました。この詩に出会って本当によかったです。

(寸評) この本に出てくる詩から生活を振り返り、自分の思いをしっかりとまとめることができていると思います。

今後の生きるヒントを考えているところも良いです。

■中学校1年生の部 最優秀賞

思い出は宝物

弟子屈中学校 江上 潔香さん



「もしも、私の大切なペットが死んでしまったら、私は、何を思うだろう。」

この物語は、あかりとソックスの物語。

あかりが十二歳の時、子犬のソックスがやってきた。父の転勤で札幌へ引越すことになり、ソックスと離ればなれになってしまおうが、もう一度ソックスと再開する。嬉しいあかりだったが、犬は人の七倍もの早さで年を取る。やっと再会できたのに、ソックスはあかりと父が見守る中、息を引きとった。

私はこの本を読んで、悲しい過去を思い出した。私にもペットがいて、その動物は犬だったからだ。その犬は、私が生

まれる前から家にいて、きょうんという名前だった。小さいころは、私になつてくれなくて、嫌だった。私には姉がいて、いつも姉のほうへ行ってしまう。どうして私の方へ来てくれないの?」とも思っていたけれど、今思うと、きつと私が怖がっていたからだ。そんな気持ちがあかりに伝わっていたからだと思ふ。私は大きくなるにつれ、不思議と怖いとは思わなくなっていた。すると、きょうんが私の方へ近づいて来てくれるようになった。すごく嬉しかったし、大好きになった。

私が小学生になると、学校へ行く時、近くに来て、「行ってらっしゃい」と言ってくれた。家に帰った時も「お帰りなさい」と出迎えてくれる。それがいつしか、あたりまえのよう感じていた。でもそれは、生きている中の小さな幸せにすぎなかった。

ある日、いつものようにきょうんが出迎えてくれたが、いつもとはちがった。いつもなら近づいてきてくれるのに、その場で寝ているだけ。私は不思議に思ったけれど、そう深く考えはしなかった。でも、次の日も次の日も、きょうんは寝ていて動かない。そのうち、姿も見せてくれなくなかった。私は忘れていたのだ。犬は人の七倍もの早さで年をとる。ということ。きょうんにもすく死がおとすれるということ。その時の私は忘れていた。

私が小学五年生になって、数カ月が過ぎたころ、きょうんは息を引きとった。そのことはお母さんから車の中で聞か

れた。私は聞いた時、お母さんの嘘だと思つた。「嘘だよね。」と何回も聞いても「本当だよ。」の一言だった。私は家についてからずっと理解した。きょうんがもうここにいないことを。理解したとたん、力がぬけたように涙が溢れ出た。ベットの上で、まへらに顔を押し付けて泣いた。次々と溢れ出した涙で、まへらはびっしょりとぬれていた。泣いている時、「どうして、きょうんの異変が死に近づいている事だと気づけなかったんだらう。」と、ずっとずっと思っていた。きょうんがいなくなつて初めて気づいた。きょうんがどれだけ私にとって大切なペットだったか。いなくなつてから、気づいたり、後悔しても意味がないの...。

一週間がすぎたころ、私は犬小屋へ向かった。きょうんに「さよなら」を言いに。それには、妹とおはあちゃんがついて来てくれた。犬小屋につき、きょうんの顔を見た。それは、ただ眠っているようだった。

私はその場に座り、泣いた。そして、「きょうんは何時くらいに死んだの?」とおはあちゃんにたずねた。おはあちゃんは、「きょうんは、潔香たちが学校に行つてから死んだの。」と答えた。私はそれを聞いた瞬間、もつと涙は溢れてしまった。それと同時に、「後悔」という気持ちが、「感謝」という気持ちに変わっていた。声には出さなかったけど、「ありがとう」と心の中心ですつとつぶやいていた。きょうんに「さよなら」をして家にもとると、自然と涙は止まっていた。きつと、「後悔」が「感謝」に変わったからだ。その時、私は決めた。き

ょうんのことではもう泣かないと。こうして、きょうんとの長い生活は、私にとつてかけがえのない宝物となり、幕を閉じた。

中学生になった私は、もうきょうんのことでは泣かなくなっていた。それは、悪い思い出がなくなつたからだ。思い出するのは全部良い思い出ばかり。でも、きょうんが死んでから、私は涙もろくなつてしまった。ずっと泣いていたから、泣き方を覚えてしまったのだ。でもそれは、きょうんが私にくれたプレゼントなのかもしれない。だとしたら、また「ありがとう」を言わなきゃいけないね。

きょうんはもう、この場所にはいないけれど、私が死ぬまでずっと、私の心の中で行き続けているから、安心していてね。いつかきょうんがこの家に帰つて来た時は、今度は私が「お帰りなさい」と出迎えてあげるから、早く帰ってきてね。

(寸評) 作品のテーマをしっかりと読み取り、自分の経験とも合わせてよく書き上げています。筆運びが上手で、まるで別の新しい物語を読むようでした。きょうんとの思い出を糧に、これからもその優しさをはぐくんできてくださいます。

そのほかの最優秀作品は、来月以降順次紹介していきます。

※児童・生徒の学年は、コンクールの行われた平成21年度当時のものです。